

各位

東京都渋谷区桜丘町20番1号
株式会社アミューズ
代表取締役社長 畠中 達郎
東証第1部(コード番号:4301)



アミューズ番組制作部制作のドキュメンタリー番組

WOWOW ノンフィクション W 「闇を歩く～ダイアログ・イン・ザ・ダーク～」

第27回 ATP賞テレビグランプリ2010 ドキュメンタリー部門優秀賞受賞!

総合エンターテインメント事業を展開する株式会社アミューズ(代表取締役社長:畠中達郎 本社所在地:東京都渋谷区 以下アミューズ)では、映画やテレビ番組など様々な映像作品の制作を行っておりますが、この度、番組制作部が制作しましたドキュメンタリー番組『ノンフィクション W 「闇を歩く～ダイアログ・イン・ザ・ダーク～」』が、第27回 ATP賞テレビグランプリ2010 ドキュメンタリー部門において優秀賞を受賞いたしました。

ATP(全日本テレビ番組製作会社連盟)は、1982年に設立され、現在では128社のテレビ制作会社が加盟する日本で唯一の全国組織の製作者団体として、テレビ界に多大な影響力を持っています。

ATPでは、制作会社の社会的機能を高め、制作スタッフ一人ひとりの情熱や気概に応えるために、創り手である制作会社のプロデューサーやディレクターが自ら審査委員となって優れた作品を選ぶ、日本で唯一の賞として1984年に「ATP賞」を創設しました。「ドラマ部門」「ドキュメンタリー部門」「情報バラエティ部門」の3部門で作品を募集し、毎年100本を超える応募作品の中から、グランプリ、最優秀賞、優秀賞などを選んでいきます。

アミューズ番組制作部が制作したドキュメンタリー番組『ノンフィクション W 「闇を歩く～ダイアログ・イン・ザ・ダーク～」』は、この第27回 ATP賞テレビグランプリ2010 ドキュメンタリー部門において、応募総数115本(ドラマ20本/情報バラエティ36本/ドキュメンタリー48本/新人賞11本 応募対象期間2009年8月1日放送分～2010年7月31日OA分)の中から、優秀賞12本の中の1つに選ばれました。

この番組は、WOWOWで2010年4月12日に放送され、ナレーションを須藤理彩、イラストを^{ジュナイダ}unaida(共にアミューズ所属)が担当し、演出を鈴木信博と満田あゆみ、プロデューサーを須田裕子(以上全員アミューズ番組制作部所属)が務めました。

世界的な広がりを見せる“暗闇のエンターテインメント”「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」。アミューズが特別協力している東京公演「ダイアログ・イン・ザ・ダーク TOKYO」における準備段階から密着取材を敢行し、世界中を感動させる不思議なエンターテインメントの舞台裏に迫ったドキュメンタリー番組です。

アミューズ番組制作部としては、第25回 ATP賞テレビグランプリ2008 ドキュメンタリー部門においても、世界3大コンクールチャイコフスキー国際コンクールで優勝したバイオリニスト神尾真由子の演奏の秘密と素顔に迫ったドキュメンタリー番組『NHK ハイビジョン特集「強く強く バイオリニスト神尾真由子 21歳」』でも優秀賞を受賞しており、今回が2度目の受賞となりました。

アミューズでは、今後も良質な映像作品の制作に積極的に取り組んでまいります。

『ノンフィクション W 「闇を歩く～ダイアログ・イン・ザ・ダーク～」』

11/6(土)午前9:00 WOWOWにて再放送決定!

<http://www.wowow.co.jp/documentary/nonfictionw/story0412.html>

「闇」がもたらすメッセージ、そして希望。世界的な広がりを見せる“暗闇のエンターテインメント”に迫る!

“見えないけど、見えてくる” 参加者の多くがそう語る話題のスポットがあります。
2009年渋谷にオープンした「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」。直訳すると「暗闇の中の対話」というエンターテインメントです。

その名の通り会場の中は真っ暗闇。自分の手のひらさえも見えません。参加者は何人か一つのグループを組み、約1時間ほどかけて闇の中を歩きます。そして、例えば水に触れたり、ビールを飲んだり、時には冒険気分で吊り橋を渡ったりなど、日常の場면을体験。視覚以外の感覚をフルに使うって楽しむという趣向なのです。

しかし、闇の中はそう簡単に歩けるはずありません。

そこで活躍するのが「アテンド」と呼ばれるスタッフ。一組に必ず一人が同行し、闇の中を導くのです。

実は、アテンドスタッフは全員が視覚に障がいを持つ人たちで構成されています。普段から暗闇の中で暮らすアテンドにとって、ここは日常の延長に過ぎません。さらにアテンドとしての特別な訓練を受けているので、健常者が闇を楽しむためのツボも心得ています。

“見えないのに、見えてくる”。そんな不思議な感覚は、こうした仕掛けによって生まれるのです。

「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」は1989年にドイツで始まりました。

発案したのは、哲学者アンドレアス・ハイネッケ氏。闇の中は、健常者と障がいを持つ人たちにある壁を、取り除くことに有効なのではないか。そして、参加する人たちの間でも、身分や肩書きにとらわれない、本当のコミュニケーションを得られる場所ではないか。ハイネッケ氏のこうしたアイデアから始まった「ダイアログ」は、その後世界に広まり、これまで600万人を動員。2009年春から日本でも長期開催が始まったのです。

一切の視覚を奪われたとき、人間の心に、どんな変化が起きるのでしょうか？ また、闇の中で共に過ごす人たちとの間に、どんな人間関係が生まれるのでしょうか？ そして、視覚障がい者にとってこのエンターテインメントがもたらす意味とは何なのでしょうか？

番組では東京開催の準備段階から密着取材を敢行。アテンドたちの思いに迫ります。さらに、闇の中で覚える不思議な感覚を、脳科学の視点から検証。その正体に迫ります。

『～ダイアログ・イン・ザ・ダーク～』 <http://www.dialoginthedark.com/>

目以外のなにかで、ものを見たことがありますか？

暗闇の中の対話。

鳥のさえずり、遠くのせせらぎ、土の匂い、森の体温。水の質感。

足元の葉と葉のこすれる枯れた音、その葉を踏みつづる感触。

仲間の声、乾杯のグラスの音。

暗闇のあたたかさ。

ダイアログ・イン・ザ・ダークは、まっくらやみのエンターテインメントです。



参加者は完全に光を遮断した空間の中へ、何人かとグループを組んで入り、暗闇のエキスパートであるアテンド(視覚障害者)のサポートのもと、中を探検し、様々なシーンを体験します。その過程で視覚以外の様々な感覚の可能性と心地よさに気づき、そしてコミュニケーションの大切さ、人のあたたかさを思い出します。

世界25か国・約100都市で開催され、2009年現在で600万人以上が体験したこのイベントは、1989年にドイツで、哲学博士アンドレアス・ハイネッケの発案によって生まれました。

1999年以降はボランティアの手によって日本でも毎年開催され、約6万人が体験しています。

(以上、ダイアログ・イン・ザ・ダーク HP より抜粋)

以上

株式会社アミューズ グループ経営企画部 広報・IR 室

<<<この件に関するマスコミの皆様からのお問い合わせ先>>>

TEL:03-5457-3358

<<<この件に関する投資家・株主の皆様からのお問い合わせ先>>>

TEL:03-5457-3390 (土・日・祝祭日を除く午前11時より午後5時まで)